

なあんも、ね



吉田道子
新井ユキコ・絵

冬の土曜日、月の美しい夜だった。

三陸の海で、耕平と奈緒は延海のぶみにあった。

「あ、のぶちゃん」

奈緒が、かけよった。

耕平は、あとずさった。

「よう、元気か」

延海は、素晴らしい、ほら、とふりかえった。

「あっ」

耕平は、おもわず、声をあげた。

「にいちゃん」

あらわれたのは、澄夫だった。

「むごうであっただんだ」

延海がいった。

「むこうって」

奈緒がきいた。

「かわっでなくて、すぐわかった。おれだち、よぐあそん

だもんなあ」

奈緒にはこたえずに延海がいい、耕平がうなずくそばで、

「だれ、あの人」

奈緒が耕平をみた。

「そっかあ。なおちゃんは、しらねえんだなあ」

延海がいった。

「澄夫だよ」